



Title	「生涯教育」へのエッセー（１）- 「風姿花伝」を読む -
Author(s)	菅原, 徹
Citation	明治大学社会教育主事課程年報, 1: 42-48
URL	http://hdl.handle.net/10291/8429
Rights	
Issue Date	1992-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

「生涯教育」へのエッセー(1)

——「風姿花伝」を読む——

菅 原 徹

しばらく前から二つの母親たちのサークルで、世阿弥(1363—1443)の「風姿花伝」(花伝)を読んでいる。一つのサークルでは、「新聞を材料に話し合う」から「教科書(日本史)を読んでもみよう」へ、そして世阿弥へ、もう一つは、河合雅雄から立原正秋へ、杉本苑子へとまったく意外な展開で世阿弥へ、ということになった。世阿弥の生きた時代、世阿弥の生涯などを調べてから「風姿花伝」を読む、「風姿花伝」第一、「年来稽古条々」を中心に読むと方向は若干ちがったが、ともに「風姿花伝」を読んでもみよう、ということになった。

そこで、話し合ったこと、感じたこと、考えたことを、まず総論的に、以下。

(1)

世阿弥は、「風姿花伝」第一、「年来稽古条々」を、「7歳」(数え年)からはじめる(「年来稽古条々」において「より」とあるのは、「12, 3」と「17, 8」だけである。「より」は「まで」を想定させる。ここでは「7歳」であるから、入門期に焦点を当ててということになるであろう。なお、世阿弥の「年齢区分」は、形式化した「発達段階区分」とは異質のものである)。

「この芸において、大方7歳をもて初めとす。このころの能の稽古、かならずその者自然といたすことに、得たる風体あるべし。舞・はたらきの間、音曲、もしくは、怒れることなどにもあれ、ふとしいださんかかりを、うちまかせて心のままにせさすべし。さのみに、善き悪しきとは、教ふべからず。あまりにいたく諫むれば、童は気を失ひて、能ものぐさくなりたちぬれば、やがて能は止まるなり。ただ、音曲・はたらき・舞などならではせさすべからず)」。

(16-17)〔「花伝書(風姿花伝)」;川瀬一馬校注,講談社,16-17頁を示す。以下,同じ〕。

入門期の稽古について、世阿弥は、子どもが自然にやりだす仕種のなかに、きつと得意とするもの——「よさ」があるだろう、それを「心のままに」やらせよ、あまりこまかく教えたり、やかましく注意したりしてはならない、という。あまりやかましく注意したりすると、子どもはやる気をなくしてしまい、「能は止まる」からである。また、世阿弥は、この段階では、大

人の真似などさせてはならず、能に基本的なこと（「舞」、「歌」など）以外をやらせてはならない、まして、晴れの舞台の「脇の申楽」（初番能）などに出演させてはならない、とのべている。世阿弥は、なによりもまず、子どものやる気——意欲を重視する。したがって、無理をさせずに、子どもが自分からやりだしたことを自由にのびのびとやらせよ（師の側はそれを見守り、大切にせよ）、と説くのである。もちろん、ここで世阿弥は、たんに「子どもの興味を引き出す」を考えていたのでもないし、「あそびながら学ぶ」を考えていたのでもない。この時期においては、「舞」、「歌」など基本的なこと以外はやらせてはならないとしているのであるが、これは、「相当こみいった」物まね（こまかい演技術）は、できても、教えない方がよいという意味であったのである。こうした世阿弥の考え方は、よく知られた「梟の比喩」に、はっきり表現されている：梟はひなの時、本当にかわいく、美しいが、大きくなると醜くなる——幼くして、年相応でないできあがった芸の持主は、大人になってだめになる。世阿弥にとって、子どもは未熟な風体であってこそ、年相応なのである。世阿弥は、この時期においては、こまかい演技術などにははしらず、基礎づくり（基本の習熟）に徹すべきだ、と考えていたのである。このように、「7歳」で世阿弥が主張しているのは、すべての前提となる「意欲」の大切さと、小さくまとまらず大きく伸ばすための「基礎づくり」の重要性である。田に水をたたえて（「舞」、「歌」のうるおいで）、苗が育つのを待つ、なのである。それは、決して「消極教育」、「自由放任」の教育ではなかったし、まして「スパルタ教育」でもなかったのである。そして、さらに、「天才教育」でもなかったのである。

つぎの段階は、「12, 3より」である。「より」とあるから、12, 3歳から17, 8歳ごろまでと考えてよいであろう。「この年のころよりは、はや漸々声も調子にかかり、能も心づくころなれば、次第次第に物数も教ふべし。まづ童形なれば、なにをしたるも幽玄なり。声も立つころなり。……さりながら、この花は真の花にはあらず、ただ時分の花なり」。(17—18) ここでの幽玄は、一生に一度しかない「少年の魅力」ともいうべきものである（「稚児」と読むか）。中性的な無垢の美、肉体的、外見的な美、自分で意識していない美。世阿弥は、「よきことはいよいよ花めけり」、「堪能になりぬれば、なにとしたるもよかるべし」という。(18)

ところで、世阿弥は、人間における「生得的」なものをどのように考えていたのであろうか。世阿弥は、「一切のことに、得手々々とて、生得得たるところあるものなり」,(45)といい、「所詮、位・長とは、生得のことにて得ずしては、おほかたかなふまじ」という。世阿弥の「位・長」論は、きわめて難解である。世阿弥は、生得の位を「長」（すっきりとした感じ）と名付ける。そして、まだ未熟な者が稽古によって位を学びとろうとしても、それはできない相談だ、とのべている。それでは、「位」とは何か。世阿弥によれば、それは生まれつきの幽玄（ここでは上品な美しさ）があるものをいうのである。世阿弥が生まれつきの美しい容姿、声など肉体的、外見的な美（それと結びついた様子、雰囲気も含めて）を、事実の問題として認めてい

たことは確かである（幽玄でない役者で「長」のあるものもいる、といういい方もしている）。問題は、世阿弥が生得的なものをどのように位置づけていたのか——生まれつきにそなわっているものと後天的に（稽古によって）身につけられるものとの関係をどのようにとらえていたのか、にある。「位・長」論の最後で、世阿弥は、「よくよく公案して思ふに、幽玄の位は、生得のものか。聞けたる位は、劫入りたるところか。心中に案を巡すべし」と突き放したい方をしている。この問題は不明確なままであったのか。

問題を整理してみよう。「まれ」な場合、「普通」の場合。「まれ」な場合：①「不思議」（まれ）に、10歳ぐらいで、自然と芸ができていふうつきの者がある（それが生得的なものか、生得的のようにみえるものかが大きな問題であるが）。②「長」「位」というものは、「おほかた」、生まれつき身にそなわったものであり、身につけようとしてもむずかしいものである。③しかし、稽古をしないと、このような生まれつきのものも、無駄ごとになってしまう。普通の場合：①普通の場合（圧倒的多くの）は、長年稽古を積ねて芸の位が上がるというのが、当然である。②とくに、まだ未熟な者は、稽古によって位を身につけようとしてもそれはできない相談である。位が身につかないどころか、今までもっていた芸も下がってしまう。③長年稽古を積み、欠点がとれてしまえば、位が自然にでてくる場合がある。世阿弥がどちらに重点をおいて語っていたのか、それはすでにとりあげた「梟の比喻」によっても明かである。

12, 3歳といえば、世阿弥（鬼夜叉）が、父親阿弥の「翁」の舞台へ、面箱をもって出た年頃でもある。小柄で、可憐な世阿弥の「時分の花」の咲きはじめの頃といってよいであろう。この「12, 3」の段は、世阿弥の体験でもあったと思われる（「読み」の視点の問題）。しかし、現代では成長の「加速現象」（肉体的、生理的成長、成熟のちがひ）のなかで、「時分の花」の咲きはじめの時期は、もっと早まっているということになるかもしれない。

(2)

「7歳」「12, 3より」は、これまでみてきたように、子ども、少年に対する師の側の稽古、教育のしかたとしてのべられているが、「17, 8より」からは、直接、本人に説ききかせるというかたちで展開する。「17, 8より24, 5まで」。「このころはまた、あまり大事にて、稽古多からず。まづ声変りぬれば、第一の花失せたり。体も腰高いなれば、かかり失せて、過ぎしころの、声も盛りに、花やかに、やすかりし時分の移りにて、てだてはたと変りぬれば、気を失ふ。……心中には願力を起して、一期のさかひここなりと、生涯にかけて、能を捨てぬよりほかは、稽古あるべからず」。(18—19)

間もなく、17, 8歳という「危機の時期」が訪れる。声が変わり、声の美しさという花がなくなってしまう、身体が急に伸びて、身体つきも変わってしまう、結果として「気を失う」からである。世阿弥は、ここで、とくに、声の変化をとりあげ、人に笑われてもかまわず、朝夕

発声を怠ってはならない、と教える。そして、心の中に強い積極的な力——「願力」をふるいおこして、「自分の一生の分れ目はここだ」と「生涯にかけて能を捨てない」決心を固める以外に方法はない、という。世阿弥の父観阿弥が旅興行の先で客死したのが1384年、世阿弥22歳の時である。この決心を、「思春期」におけるある種の屈辱感と喪失感を経た、世阿弥自身の決心ととらえるのが自然である。「ここにて捨つれば、そのまま能はとまるべし」は、観阿弥が息子世阿弥に語ったことばではなく、世阿弥自身の決心にかかわると思われるのである。

「24, 5」。「このころ、一期の芸能のさだまる初めなり。……歳盛りに向う芸能の生ずるところなり。さるほどに、よそめにも、すは上手いで来りとて、人も目に立つるなり。もと名人などなれども、当座の花めづらしくして、立合勝負にも、一旦勝つときは、人も思いあげ、主も上手と思ひ初むるなり。これ、かへすがへす主のため仇なり。これも真の花にはあらず。年の盛りと、みる人の、一目の心の珍しき花なり。真の目利は見分くべし。このころの花こそ、初心と申すころなるを、極めたる様に主の思いて、はや申楽にそばみたる論説とし、いたりたる風体をする事、あさましきことなり」。(19—20)

世阿弥は、24, 5歳頃が生涯の芸の成否が定まる時期、ととらえている。この時期は若盛りの時期であり。人も賞め、名人と呼ばれる人との立合いにおいても勝つこともある、そんな時期である。しかし、これは、観客が一時的な心理から「めづらしい」と感じる花にすぎず、真の花ではない。世阿弥はこの頃の花こそ、初心ともいうべき「未熟」な時期だ、としている（「初心不可忘」は、よく知られているように、世阿弥のことばである。しかし、その場合の初心は、「後心」に対するもの）。世阿弥は、一時的な花を真の花と錯覚してはならない、実力以上に上手とうぬぼれず、自分と対峙し、「わが位のほどよくよく心得」、稽古にはげめ、と説くのである。

世阿弥の有名なことばのひとつに、「稽古は強かれ、情識はなかれ」がある。このことばは、この段階にもっとも相応しい。「されば、上手にだにも情慢あらば、能は下るべし。いはんや、かなはぬ情慢をや。よくよく公案して思へ。上手は下手の手本、下手は上手の手本なりと、工夫すべし」。(47) 世阿弥は、上手も、下手によいところがあればこれを真似するがよい（これが上達の第一の方法）、下手も、上手の悪いところに気づいたら、未熟な自分のことだからもっと悪いところが多いにちがいないと考えて、ますます稽古にはげむ必要がある、という。どちらも、慢心してはならないと諫める。

世阿弥にとって、重要な概念のひとつである「公案」が、「年来稽古条々」においてはじめて出てくるのが、この段階である（禅では師が弟子に与え、考えさせる課題をさしているが、世阿弥は、工夫、思考の意味に使っている）。「初心と申すはこのころのことなり。——公案して思ふべし」。この段階から、稽古と並んで常に「公案」を要求するのである。

こうして、盛りの絶頂の時期—転換期「34, 5」に入る。この時期以降は、自分で自分を見つ

める時期である。「このころの能，盛りの極めなり。ここにて，この条々を究めさとりて，堪能になれば，さだめて天下に許され，名望を得べし。もし，この時分に，天下の許されも不足に，名望も思ふほどなくば，いかなる上手なりとも，いまだ真の花を究めぬしてと知るべし。もし究めずば，四十より能は下るべし。これ後の証拠なるべし。さるほどに，上るは三十四五までのころ，下るは四十以来なり」。(21)

盛りの絶頂の時期，体力，気力，わざの「調和」が絶頂に達する時期。世阿弥がほぼ10年間にわたる「空白の時期」を経て，歴史の表面にあらわれるのは（記録として），1394年である。この年，足利義満が興福寺一乗院にて，世阿弥の能を観る，とある。一条竹鼻における三日間の勸進能の興行は，1399年世阿弥，37歳。このことは，世阿弥がすでに34，5歳で，名声を博していたことを示すと思われる（世阿弥が22歳からこの時期まで，どこで，だれの下で修行したのか不明である。円満井座でか）。

世阿弥は，もしこの時期までに「真の花」を究めなかったら，40を過ぎてから能は下り坂になるだろう，という。それでは，「真の花」とは何か。「時分の花・声の花・幽玄の花，か様の条々は，人の目にもみえたれども，その業よりいでくる花なれば，咲く花のごとくなれば，またやがて散る時分なり。されば，久しからねば，天下の名望すくなし。ただ真の花は，咲く道理も，散る道理も，人のままなるべし。されば久しかるべし」。(53) すでにふれてきたように，「時分の花」とは，肉体的，外見的花，若さによる花であった。この花は，一時的な条件によって現われでる花であるから，花が自然に咲き，すぐ散るように，時期がくれば散ってしまう花である。また，「時分の花」とは，観客が一時的な心理からめづらしいと感じる花である。このような「時分の花」に対して「真の花」とは，真実の芸の力から生ずる花であり，したがって，肉体的，外見的花の美しさがなくなってもなくなる花，一時的な若さによるのではない花である。ここまでは，分りやすい。

世阿弥にとっては，よく知られているように，能においては「花」を悟ることが「無上第一」であり，能の奥儀を「究めるなるべし」であった。それでは，「花」と「花は心，種はわざ」は，どのようにかかわるのか。この問題は，むずかしい。世阿弥は，「花と，おもしろきと，めづらしきと，これ三つは同じ心なり」，という。(82) また，「見る心にめづらしきが花なり」ともいう。このように，世阿弥にとって，「花」とは，何よりもまず，観客の側の問題であり，「おもしろい」，「めづらしい」（「珍奇でなく」，「思いがけない」，あるいは「新鮮な魅力」といかに感じるとかという問題であったのである。(84) そして，多様なわざを身につけ，「物数」を究め，芸の実力を養い，それを発揮する工夫を会得して，「めづらしい」という感じを心得るのが「花」というものである，とのべる。「花」とは心の工夫の問題でもあったのである。ここで，世阿弥の「花」には，二つの視点があることに気づく，観客の側の視点と演ずる側の視点である。

演ずる側の視点に立って、「花」を考えてみよう。「花は心，種はわざ」，すなわち，花を咲かせるものとの種は「物数」を究め，身につけたわざ——実力，そのわざ——実力を発揮するのは心の工夫。「能を知る心にて，公案をつくして見ば，花の種を知るべし」。(80)「能を知る心」とは何か，「能を知る心」が心の工夫の前提条件なのか。「上手の，達者ほどはわが能を知らざらんよりは，すこし足らぬしてなりとも，能を知りたらんは，一座建立の棟梁にはまさるべきか。能を知りたるしては，わがてがらの足らぬところをも知るゆゑに，大事の能に，かなはぬことをば斟酌して，得たる風体ばかり先に立てて，したてよければ，見所の褒美かならずあるべし。さて，かなはぬところをば，小所，片辺の能にしならふべし。か様に稽古すれば，かなはぬところも，劫入れば，自然自然に，かなふ時分あるべし。さるほどに，つひには，能にかさもいでき，垢も落ちて；さだめて，年ゆくまで，花は残るべし」。(80—81)これは，非常に解りにくい。ただはっきりしていることは，「年ゆくまで，花は残るべし」が，たんにわざを身につけ，実力を養えばよいという問題にとどまらず，能の本質をわきまえ，実力を発揮する工夫自得の問題を含んでいるということである。「演ずる自分」と「観客」を視野に入れて，である。「花」を咲かせる，ある種の「構想力」，「演出力」ともいうべきものか。

それはそれとして，世阿弥は，「34，5」の後段で，「このころ天下の許され得ずば，能を究めたると思うべからず。ここにてなおつつしむべし。このころは，過ぎし方をもおぼえ，また，行く先のてだてをもおぼゆる時分なり」，とのべる。(22)まさに盛りの絶頂の時期に，これまで自分がやってきたことをよく反省し，またこれからどうやって行ったらよいのか，そのやり方なども考えることが必要だ，と自戒しているのである。

(3)

「44，5」，「50有余」。世阿弥の「年来稽古条々」は，一度に書かれたものでなく，まず，最初に，「7歳」，「12，3より」の草稿がつくられ，つづいて「17，8より」，「24，5」，「34，5」が執筆されて一段落，それに「44，5」が追加され，「50有余」がさらに加えられて成立したものである（38歳頃）。したがって，「44，5」と「50有余」は，まだ体験できなかった年代であった。文章表現も，このことを示している。（「44，5」，「50有余」は，父親阿弥の教えが強く反映している部分でもあると思われる）。

世阿弥は，これらの段階では，どんなことをのべているのであろうか。「44，5」：「このころよりは，能のてだて，おほかた変るべし。たとひ，天下に許され，能に得法したりとも，それにつきても，よきわきのしてを持つべし。能は下らねども，力なく，やうやう年たけゆけば，身の花も，よそめの花も，失するなり。…このころよりは，さのみに，こまかなるものまねをばすまじきなり」。(22)「50有余」：「このころよりは，おほかた，せぬならでは，てだてあるまじ。麒麟も老いては驚馬に劣ると申すことあり。さりながら，真に得たらん能者ならば，

物数はみなみな失せて、善悪の見所はすくなくとも、花は残るべし。(23—24)

能のわざは下らなくとも、だんだんと年をとり、わが身の美しさも、人の目に映る美しさもなくなってしまう。これは、人間の力で如何ともしがたいことである。身のほどを知れ。50歳を越してからは、駿足の良馬も、老いては駕馬に劣るといわれるが、無用のことをしないということの外には、適当なやり方はない(どのように読んでも、「駕馬」と「せぬならでは、てだてあるまじ」は直接結びついている。「おほかた」ではあるが)。しかし、ここで世阿弥が思い出しているのは、浅間神社の能で「見物の人々が皆一同ほめそやした」、52歳の父親阿弥の姿なのである。「花は残るべし」ではなく、「花は散らで残りしなり」なのである。いずれにせよ、「50有余」の前段をそのまま受けとる必要はないと思われる(前段と後段の質のちがいの問題)。何よりも、世阿弥の「50有余」の活動を思い浮べればよいのであるから。

これまで、前期の世阿弥を、母親たちと一緒に読んでいる「風姿花伝」第一、「年来稽古条々」を中心にみてきた。まとめておこう。

世阿弥の「生涯教育」論は、つぎのように展開する：

- ① 「ふとしいださんかかりを、うちまかせて心のままに」させ、同時に能の基本、「二曲」、すなわち「舞」、「歌」をしっかり教える(「7歳」)。
- ② 「子どものしやすい得意な点」を活しながら、能に基本的なこと——老・女・軍の三体へ、「型」に正しくしたがって稽古をさせる(「12, 3より」)。
- ③ 稽古をあまり多くしないで、心の中に「願力」をふるい起して、「決心」(専心修行への覚悟を決める)する(「17, 8より」)。
- ④ 「稽古は強かれ、情識はなかれ」を実践する(「24, 5」)。
- ⑤ 「能を知り」、「花は心、種はわざ」を実現し、自省、自戒する(「34, 5」)。
- ⑥ 身のほどを知り、「すくなすくな」とする(「44, 5」)。
- ⑦ 「おほかた」、「せぬならでは、てだてあるまじ」、無用のことはしない(「50有余」)。

「これはすごい」、みんなそんな思いであった。「人間50年」ではない時代において、自分の年齢段階(自然年齢でなく)をどこにおくか——これはひとりひとりの「問題」だろうということになった。なお、読んでいて、とくに時間をかけて話し合った問題は、本年報 No. 2以降にまわした。